

2023年度 奨学生総評 龍 秀美

奨学生選考にあたって、まず10篇の中にこの一年間に選んだ作品が5編以上含まれている作者を挙げた。その結果、応募者の中から8名が挙がった。今年度は15名程度を推薦してほしいとのことなので、応募作のなかで月間総評にとりあげた作品の多い作者を中心に6名を加えて推薦作品とした。

10作品の自選ということは、奨学生の場合かなり難しい問題を含む。将来大きな可能性を秘めても作者自身がまだ自分のスタイルに気づかないこともあり、選ぶ立場からも作者の自選の中に期待した作品が入っていない場合は、全体的には評価しながらも推薦から外すことがあった。しかし応募資格を得るためにには年間を通じてかなりの作品を投稿せねばならない。それを継続すること自体すでにひとつの才能であり、候補にあがった作者は可能性としてほとんど優劣がない。今後もぜひ続けてほしいと思う。

現代詩を専門とする私としては、一つ一つの作品を単独の独立した詩として見るため、10作品を並べての連続性にはこだわっていない。むしろ、その作者が持っている物事への関心や考え方や文学としての思想を見る。つまりかたちとしてはアイデアや視野の広さが大きな比重を占める。近年、世界が騒がしくなる中でおのずと作品も時代を反映することになり、今年はそういう作品にも魅かれた。口語詩句という詩形は新しい時代の新たな冒険を許してくれる場のような気がする。

以下特に記憶に残った作品を記してみる。

中矢 溫（中矢 溫）

鰯雲ここも誰かの歌枕

短詩縦書き重力をいかんなく

高田 翯輔（真島しましま）

南館の/便器のレバーは/冷たくて/ぐおんぐおんと宇宙は広い

僕の字が/君のはらから/声帯を/伝って、ぱっ。/くちびる踊る

奥村 俊哉（長谷川柊香）

仲直りせず初雪を赤い靴

杉原 健吾（F i 1 m）

祖母の名は陽子といった/僕もまた/きっと誰かの素粒子である

渡邊 早紀（マズルカ）

観音の/口にいちごを捻り込み/如来になりゆく嫗の両眼

難しい方の「お」です、/そう「を」です。/しゃがんで蟻を見てるみたいな

塩田 きよら（汐見りら）

脊椎の窪みの鋭さをなぞる/きみは死んだら良い薔薇になる

雀荘は海へと還る/あのひとが/骨張った手で洗牌すれば

郡司和斗（郡司和斗）

向かいあう遠景を/だっこひもに頼って/くすんでいく/鳥の声がきこえた

私は布団を売るために生まれ/実際たくさん野菜を売り/よく壁をながめていた

渡邊 美愛（さいう）

好きだとは言えない/距離に落ち着いて/手持ち花火を見つめるばかり

ぼにーてーる/に/風は結われて かっとばん/剥がしきみと別れる